



一橋大学機関リポジトリ

HERMES-IR

Title	E・フロム著『マルクスの人間概念』
Author(s)	富沢, 賢治
Citation	一橋論叢, 51(3): 362-369
Issue Date	1964-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10086/3140
Right	

書 評

E・フロム著『マルクスの間人概念』

Erich Fromm, *Marx's Concept of Man*, New York, 1961, pp. XII+260.

富沢賢治

世界各地において、人間の自己疎外が声高く叫ばれている今日、マルクスの間人概念にたいする関心が高まりつつある。アメリカ社会においても、内的には「われわれの時代のムード」としての「人間疎外の意識」が濃くなるにつれ、また外的には西欧における盛んな初期マルクス研究のあおりをうけ、ここ数年来、疎外論にかんする論文が続出している。日高六郎氏が指摘しているように、アメリカの社会科学研究にかなり根強い心理主義的傾向と関連して、それら諸研究には疎外現象をフロイト主義あるいは新フロイト主義による立場から精神分析的に解釈しようとする傾向がみられる。このように疎外概念を社会体制の概念と切りはなして単に心理学的に解釈しようとする傾向は、すでに幾多の論者が指摘しているように、疎外概念の内容

を本来マルクスが意味したものとは全然異なったものにしてしまう危険性をもっている。

このような心理学的解釈にたいして、他方、疎外概念をマルクスの思想、特にマルクスの初期の思想にそくして、より思想的に究明しようとする試みがみられる。フロム著『マルクスの人間概念』は、かかる思想的解釈の試みの一つである。本書は、人間概念を中心にマルクスの基本的諸概念を特にアメリカ社会に広くみられる誤解から解放し、疎外概念をマルクスの人間観という視野のなかで再検討しようとする試みである。フロムは本書の後半にT・B・ボットモアの英訳になるマルクスの『経済学・哲学手稿（一八四四年）』（以下『手稿』と略称）を付し、アメリカ社会で初めて『手稿』の英訳を刊行した功績をになっている。⁽⁶⁾フロムの論文は『手稿』解説の役割をものはたし、アメリカ社会における初期マルクス解釈の典型例を示している。以下、順をおって本論文を要約しよう。

(1) F. Pappenheim, *The Alienation of Modern Man. An Interpretation Based on Marx and Tönnies*, N. Y., 1959. 栗田賢三訳『近代人の疎外』岩波書店、一九六〇年。第一章のタイトル。

(2) バッペンハイムが『近代人の疎外』において疎外概念の重要性を指摘した一九五九年以降が特に多⁽⁷⁾。左記の諸論文参照。

A. Davids, *Alienation, Social Apperception and Ego Structure*, in *Journal of Consulting Psychology*, Feb-

- February 1955.
- G. Nettler, A Measure of Alienation, in *American Sociological Review* (社会学季刊), December 1957.
- D. Bell, The Meaning of Alienation, in *Thought*, 1959.
- M. Seeman, On the Meaning of Alienation, in *A. S. R.*, December 1959.
- J. P. Clark, Measuring Alienation within a Social System, in *A. S. R.*, December 1959.
- D. G. Dean, Alienation and Political Apathy, in *Social Forces*, March 1960.
- W. E. Thompson and J. E. Horton, Political Alienation as a Force in Political Action, in *Social Forces*, March 1960.
- R. Keniston, Alienation and the Decline of Utopia, in *The American Scholar*, Spring 1960.
- D. G. Dean, Meaning and Measurement of Alienation, in *A. S. R.*, October 1961.
- J. Hajda, Alienation and Integration of Student Intellectuals, in *A. S. R.*, October 1961.
- C. J. Browning, et al., On the Meaning of Alienation, in *A. S. R.*, October 1961.
- L. J. Pearlin, Alienation from Work: A Study of Nursing Personnel, in *A. S. R.*, June 1962.
- M. Seeman and J. W. Evans, Alienation and Learning in a Hospital Setting, in *A. S. R.*, December 1962.
- A. M. Rose, Alienation and Participation: A Comparison of Group Leaders and the "Mass", in *A. S. R.*, December 1962.
- L. Feuer, What is Alienation? The Career of a Concept, in *New Politics*, 1962.
- A. G. Neal and S. Retting, Dimensions of Alienation among Manual and Non-manual Workers, in *A. S. R.*, August 1963.
- M. Seeman, Alienation and Social Learning in a Reformatory, in *American Journal of Sociology*, November 1963.
- なお、これらの諸論文の一部については、日高六郎氏による紹介(「現代における自己疎外」思想、一九六二年十月号)がある。
- (3) 日高六郎「前掲論文」ニペーシ参照。
- (4) 特に、芝田進午「社会心理学の批判——フロイト主義を中心として」法政大学社会労働研究、一九五五年第四号、参照。
- (5) 古くから初期マヘンクスの思想に関心を示している研究家として S. Hook (① Towards the Understanding of Karl Marx, N. Y. & London, 1933. ② From Hegel

to Marx. Studies in the Intellectual Development of Karl Marx, London, 1936. ③ Marx and the Marxists. The Ambiguous Legacy, N. Y., 1955.) ④ H. Marcuse (Reason and Revolution. Hegel and the Rise of Social Theory, N. Y., 1941.) ⑤ ヌンヤエフスカヤは R. Dunayevskaya (Marxism and Freedom——from 1776 until Today, N. Y., 1958.) ⑥ R. Tucker (Philosophy and Myth in Karl Marx, N. Y., 1961.) などがある。

(9) ただし第一手稿中経済学研究に关する部分が省略されている。なお、『手稿』英訳には左記のものがある。

Selected Essays from the Ökonomisch-Philosophische Manuscripte, translated and edited by R. Stone, N. Y., 1947, (謄写版「ハンノマン」部分記)

Karl Marx: Selected Writings in Sociology and Social Philosophy, translated and edited by T. B. Bottomore and M. Rubel, London, 1956. (部分記)

Marx, Economic and Philosophic Manuscripts of 1844, translated by M. Milligan, Moscow, 1959. (全訳。同年「キール」の Lawrence and Wishart 社による全訳を出版するなど)

R. Dunayevskaya, *op. cit.* (部分記)

Karl Marx: Early Writings, translated and edited by

T. B. Bottomore, London, 1963. (全訳)

K. Marx, Economic and Philosophic Manuscripts of

1844, N. Y., 1963. (未入手で詳細不明)

二

まず序文においてフロムはマルクスの哲学を「人間疎外、人間の自己喪失および物化にたいする抗議」であると規定して、「彼のヒューマニスト実存主義に关するかぎり反対する点とはほとんどない」と述べる。フロムによれば、マルクスのヒューマニズムを非難することではなく、むしろそれに基づくことによって「正気の社会」は可能となるのである。

第一章「マルクスの諸概念の歪曲化」においてフロムは、特にアメリカ社会においてはなほだしいマルクスの諸概念の歪曲化の例をいくつか示し、それらにたいして本書が論証せんとするのはなかならず次の諸点であると述べる。一、マルクスの目的は、人間が真の人間となるために、人間を経済的欲求の抑圧から解放することにある。二、マルクスの主要関心事は、個人としての人間の解放、疎外の克服、人間と自然とに全体的にかかわりあう人間能力の回復である。三、マルクスの社会主義は、本質的には、十九世紀の言葉で語られた「予言者のメシア主義」prophetic Messianism である。四、マルクスの哲学は「世俗的な言葉でいえば、「精神的実存主義」spiritual existentialism であり、この精神性の故に、現代の皮相な唯物論に反対するものである。

第二章「マルクスの史的唯物論」においてフロムは、マルクスの「唯物論的」歴史解釈とは、現実に行きっている諸個人が歴

史の主体であり、歴史法則を認識する主体であるということの意味するものであると述べる。それ故、フロムによれば、「マルクスの歴史解釈は、もし『唯物論的』および『経済的』という言葉の不明確さを避けたいならば、人間学的歴史解釈 *anthropological interpretation of history* とよばれることができる」ようなものである。このような解釈にもとづいてフロムはここでマルクスの史的唯物論を人間と自然との対立関係を基礎に説明している。

第三章「意識、社会構造および力の使用の問題」においてフロムは、まず下部構造と上部構造との関連についてマルクスのいくつかの命題を引用し、意識と力について次のように説明する。フロイトと同様、マルクスによれば、人間の意識的な思考は「虚偽の」意識、イデオロギー、ラシヨナリゼーションであり、この意識的な思考の盲目性が真に人間的な欲求を意識することを妨げているのである。しかしながらマルクスの上部構造論を、人間は環境にたいして常に受身にたつものだと解釈するのは誤りで、マルクスは逆に歴史をつくる人間の主体的行為の「力」をも強調しているのである。マルクスの力の概念を単なる暴力と解することは正しくない。マルクスによれば、力はおこっている発展に最後の一押しをするだけのものであり、力それ自身だけでは社会過程で準備されてきていないものをつくりだすことはできないのである。フロムによれば、このような考え方をふくんだマルクスの力の概念は、従来の力の概念よりも進んだものである。

第四章「人間の本性」においてフロムは、マルクスの人間性概念を次のように説明する。人間性の概念はマルクスにあっては単なる抽象物でもなければ、純粹に生物学的なものでもない。それは孤立した個人のうちに存在する統計的実体ではない。マルクスにとって人間の可能性とは一つの与えられた可能性であり、いわば一つの人間の原料である。人間はそれを歴史過程のなかで開発し、自己自身を發展変化させる。歴史とはこの意味で人間の活動と生産の過程を通じた人間の自己創造以外の何ものでもない。人間の本性は、人間のうちに可能性として存在し、歴史過程のなかで展開していくものとしてみることが出来る。それは歴史過程におけるその多くのあらわれ（および歪曲）から推論できるものである。それはまた歴史的諸時期における「修正された人間性」とは区別されうる「人間性一般」、あるいは人間の歴史的現存の諸形態に對置された人間の「本質」としてみることが出来る。マルクスの人間性概念をこのようにめぐれて歴史的な概念であるとしたフロムの指摘は重要であろう。

これにつづいてフロムはマルクスの活動性の概念あるいは労働の概念を次のように説明する。マルクスによれば、人間主体は、生産的であるかぎり、すなわち独自の人間的諸力をあらわす行為により客体世界を自己のものとするかぎりにおいて、はじめて人間的に生きているとされる。それ故、活動性の概念あるいは労働の概念がマルクスの人間観にとって特に重要な概念となる。マルクスにとって、労働とは人間と自然とを媒介するものであり、自然とのメタボリズムをはかろうとする人間の努

力であり、人間の肉体的精神的諸力の表現であり、人間の自己表現である。なおこの章でフロムは、人間が主体との分離を克服するというゲーテ、ヘーゲルおよびマルクスの思想は禪思想に共通するものであるという非常に独自の見解を述べている。

第五章「疎外」においてフロムは、マルクスの生産的人間という概念は生産性の否定すなわち疎外の概念を明らかにしないかぎり十分理解しえないとして、疎外を次のように定義する。

「マルクスにとって疎外とは、人間が世界の把握において自己自身を活動的主体としては感ぜず、世界（自然、他人および彼自身）が彼にとって異質なものに感じられるということの意味する。人間自らの創造物といえども、それらが客体として彼の上に、また彼に対立して存在する。疎外とは本質的には世界と自己とを受動的、受容的に客体から切りはなされた主体として経験することである。」フロムによれば、マルクスの疎外の概念は、ヘーゲルにおけると同様、本質と現存との区別にもとづいている。すなわちマルクスは、人間の現存が人間の本質から疎外されており、現実の人間が本来ありうべき人間から離れているところに人間の自己疎外をみた、とされるのである。本章においてフロムはまた、すでにティリッヒ (P. Tillich) やレヴィット (K. Lowith) により指摘されたことであるが、疎外概念の最初の表現が旧約聖書の偶像崇拜の概念のうちにみられるということ強調している。

第六章「マルクスの社会主義の概念」においてフロムは、「マルクスの社会主義の概念は彼の人間の概念から出ている」

として、「社会主義とは、人間が彼の生産物、労働、仲間、彼自身および自然からの疎外を克服し、彼自身に回帰し、彼自身の諸力で世界を把握し、かくして世界と一体となることのできるような生産様式と社会組織を創り出すことである」と規定している。そしてここでもまたフロムはマルクスの思想と宗教との類似性を強調して、「マルクスの社会主義は過去の偉大なヒューマニスティックな諸宗教に共通してみられるもっとも深い宗教的衝動の実現を意味する……」、「マルクスの無神論は合理的神秘主義 rational mysticism のもっとも進んだ形態であり、マイスター・エックハルト Meister Eckhart あるいは禪宗により近いものである……」と述べている。フロムによれば、マルクスの社会主義は旧約の予言者のメシア思想とギリシャ・ローマ思想におけるヒューマニズムの精神的根源と密接な関係がある。メシア思想の主流は、ルネサンスの思想、啓蒙思想、英仏の市民革命の思想を経て、「その最新の、もっとも完全な表現をマルクスの社会主義の概念のうちに見出した」とされる。フロムは、「旧約思想がモーゼス・ヘスのような社会主義者を通してマルクスにどのような直接の影響をおよぼしたかは別として、予言者のメシア思想の伝統が啓蒙思想家の思想を通して、また特にスピノザ、ゲーテ、ヘーゲルから発する思想を通して彼に間接的影響をおよぼしたことは疑いない」と確言するのである。

第七章「マルクスの思想における継続性」においてフロムは、マルクスの初期の思想は後期になっても基本的に変化して

いないとして、ソ連邦のコミュニストたちが若きマルクスの人間観と後期マルクスの人間観とのあいだに矛盾をみようとするのは、彼らの思想、社会体制、政治体制があらゆる点でマルクスのヒューマニズムに対立するからである、と述べる。そして、「マルクスが初期の諸著作において発展させた人間の概念にたえずしては、後年彼が発展させた社会主義概念と資本主義批判とを理解することは不可能である」と結論して本章を結んでいる。

第八章「人間マルクス」は付論のごときものでフロムの見たマルクス自身の人間像が描かれている。しかしそこには期待されるようなフロイト的分析は見られない。フロムによれば、マルクスこそまさに「彼の諸著作が新しい社会の人間として描いているような生産的な、疎外されていない、独立の男であった」のである。

三

マルクスの思想の基本的テーマを西欧ヒューマニズムの伝統に根ざす人間解放の問題にとりて、彼の人間観を支点にマルクス主義を再検討しようとする試みは、これまで初期マルクス研究の盛んな西独、フランスにおける諸研究において意識的にせよ無意識的にせよ多少とも試みられてきてはいた。⁽¹⁾しかし、それが意識的に中心テーマに設定されているところに本書の特徴がある。このような試みはマルクス主義の再検討の試みとして重要な意義をもちうると考えられるだけに、それが内包

する諸問題は無関心に放置されるべきではなからう。以下、本書のもつ問題点を三つの側面から考察してみたい。⁽²⁾

まず第一に、マルクスのヒューマニズムと階級闘争理論との内的論理的関連が明らかにされえないかぎり、彼の人間観の特異性は把握されえないはずであるが、フロムはこの関連を完全に無視している。フロムは史的唯物論解釈において、生産力と社会機構とのあいだの矛盾は説明するが、生産関係内部における矛盾については一言も述べていない。彼は、「人間の進化は、あらゆる歴史において、人間の自然にたいする闘いによって特徴づけられている」(一九頁)という点を強調して、矛盾の問題を人間と自然との矛盾に一元化して考えてしまう。フロムによれば、矛盾は「社会」が新しい生産方法を「えらぶ」ことにより解決されるのである(一九頁)。こうして史的唯物論から階級闘争と革命という重要な概念がぬけておちてしまう。マルクスの人間概念の特異性はそれが明確な階級的見地と革命的人間観の基礎の上に立つところにある。しかるにフロムは、マルクスの人間観とそれに先行する西欧ヒューマニズムの伝統との同質性を一面的に強調することにより、マルクスの人間概念をかえって不明確なものにしてしまっているといえよう。⁽³⁾

このようにフロムがマルクスのヒューマニズムと階級闘争理論との論理関連を把握しえなかったことは、彼の思想史理解の誤りと無関係ではない。これが本書のもつ第二の問題点である。マルクスが問題としたのは基本的には個々の人間ではなく全体としての人間であった。しかるにフロムはマルクスの人間

観の出発点を個人にみる。マルクスの階級闘争理論はフォイエ
ルバッハにおいて理論化された全体的人間観との関連において
はじめて明確に理解されるものであるが、フロムは、本書に
かんずるかぎりでは、フォイエルバッハのマルクスへの影響を
全く無視している。このように複雑な思想史理解は、マルクス
の哲学を「個人主義の全き実現を目ざすもの」(三頁)とか
「精神的実存主義」(五頁)、「ヒューマニスト実存主義」(序文
Ⅷ頁、本文七一頁)などと定義する誤りと無関係ではなく、ひ
いてはマルクスの人間観をその階級闘争理論との内的論理関連
をもって把握しえなかったことと無関係ではなからう。

本書のもつ第三の問題点は、フロムが主としてマルクスの初
期の諸著作にのみ依拠して彼の人間観を説明しようとしている
点にある。初期マルクスの思想をその発展において、特にその
後期の思想との関連においてとらえず、そのみを切りはなし
て対象とするとき、それはいかようにも変造可能となろう。例
えば、フロムは、疎外概念の経済学的分析というマルクスの主
要な業績を無視して、疎外概念を人間の現存の人間の本質から
の背離という人間学的な意味に抽象化し、それをヘーゲル、フ
ォイエルバッハの段階にまでおしもどしてしまっている。フロ
ムはまた、疎外の基礎を社会の経済構造においてみることをせ
ずに、むしろその政治組織においてみようとしている。彼は、
経済社会と政治社会との関連を明確に規定しないまま、現代社
会を「社会主義社会」か「資本主義社会」かと経済社会的にわ
けることの無意味性を主張し、現代社会を政治社会的に一元化

して、「民主主義社会」と「全体主義社会」とにわけてしまう。
こうしてフロムもまた、初期マルクスの思想に依拠しながら
「全体主義社会とそのコミュニズム」を批判するというアメリ
カ社会における初期マルクス研究に共通してみられる結論へと
到達するのである。

本書の特徴の一つは、フロムがここで、西欧諸国の初期マル
クス研究においてすでに個別的にだされている諸結論を、その
詳細な実証研究から切りはなして、総合しているところ
にある。それだけに本書のもつ問題点は西欧諸国における初期
マルクス研究が共通にもつ諸々の問題点を集約的に表現してい
るように思われるのである。

(1) 特に西独では *Marxismusstudien* 誌を中心とする諸研
究、その代表的研究としては E. Thier, *Das Menschen-
bild des jungen Marx*, Göttingen, 1957. 参照。フラン
スは *L'Action Populaire* を中心とする諸研究、その代
表的研究としては P. Bigo, *Marxisme et Humanisme*,
Paris, 1954. 参照。

(2) ただしここでは、初期のマルクスが社会主義の目的と
して「労働の廃棄」を主張していた(四〇頁)とか、二十
四歳で結婚した(八〇頁)とかいう事実のうえでの誤り
や、マルクスの思想が禅思想に類似するというような論証
を欠いた結論については論評しない。なお後者の結論につ
いては、他の諸点においてフロムと見解を同じにする S.
フックですら「愚の骨頂」the ultimate in absurdity (S.

Hook, From Hegel to Marx. Studies in the Intellectual Development of Karl Marx, Michigan 1962, New Introduction, p. 4.) である。述べて置く。

(3) マルクスの思想とその先行思想とのあいだの類似性を一面的に強調する西独、仏、英、米における初期マルクス研究者にたいする東独、ソ連邦の研究者による代表的批判としては、東独では R. O. Gropp (Die marxistische dialektische Methode und ihr Gegensatz zur idealistischen Dialektik Hegels, in *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, Heft 1 u. 2, 2. Jahrgang, 1954.) の批判的見解が未だに支配的であるようだし、ソ連邦では Т. И. Озерман による最近の初期マルクス研究 (Формирование философии марксизма, Москва, 1962.) における

批判的見解が、M. Митин による書評 (*Коммунизм*, 1963, No. 6, стр. 116—120.) によってかなり高く評価されているところからみても、支配的なものと思われる。ただしグロップやオイゼルマンらの思想史理解は逆にマルクスの思想とその先行思想とのあいだの断絶性を一面的に強調しているという点でかなり問題がある。

(4) フロムはさらにマルクスの人間観が旧約聖書の人間観から出発していると解釈してマルクスの思想と宗教との類似性を強調している。この点にかんしては、マルクスの伝記的理解からみても問題が残されているので、他の研究者の見解とともに、別の機会に詳論したい。

(一九六三・一二・一六) (一橋大学大学院学生)